

館林キリスト教会 デボーションノート（2006年）

10月 1日 今日の通読箇所 出エジプト記1： 1～14

10月 2日 今日の通読箇所 出エジプト記1：15～22

「新しい王」 出エジプト記1章

前に記したように、エジプトの総理大臣だったヨセフはその頃、外来王家であるヒクソス王朝の、エジプト完全支配のために貢献したのだった。ところが今や、いわゆる王政復古が行われて、エジプト人の王朝が立てられると、国の形勢は変わった。イスラエル人は追放したヒクソスの片割れとして憎まれる。しかも優秀で繁殖力が強く、国境近くに一大勢力を維持しているので、なおさら警戒された。警戒は憎悪に、また迫害に進展する。次第に彼らは人権を奪われ、強制労働に駆り出された。しかも最後には非人道的な人口削減政策を強制されたのだ。これが神様の干渉によってうまくゆかないと、王様はいら立って「イスラエル人の男の子は、みんなナイル川に投げ込んで殺してしまえ」などと言い出す始末だった。しかしまさかこんな感情的な発言が厳格に励行されたとは思えないが、当時のイスラエル人にとっては深刻な恐怖で、ある程度子供が犠牲になったことと思われる。

10月 3日 今日の通読箇所 出エジプト記2： 1～10

「解放者モーセの誕生」 出エジプト記2章

ここに「信仰によってパロの命令をも恐れず、生れた男の子を救おう」とした若い夫婦がいた。「生れてくる幼子が、救い主である」という預言は、もちろんキリストを指すのだが、今のような絶望状態の中で「誰か知らぬが、我々の中の一人の男の子が、我々を救う望みがある」と信ずるのはイスラエル人にとって、自然である。だから「男の子皆殺し」の命令は、救い主の約束に対する挑戦だったのだ。この若い夫婦が命がけで幼児を守ろうとしたのも、父母の自然な人情だけではなく、たしかに「信仰の業」だった。神様の摂理の中に救われたこの幼児は、これから数奇な運命をたどることになるが、結局彼こそは、神に立てられてイスラエルの解放者、指導者、建国者となる、旧約聖書中最大の人物、モーセその人なのである。

10月 4日 今日の通読箇所 出エジプト記2：11～25

「モーセの激越」 出エジプト記2章

モーセは不思議な神の摂理によって、エジプトの王宮で育った。そして世界最高のエジプト文化の中で学問教養を身につけた。成人してからは軍隊を指揮して実際に戦争をしたこともあった。これらは神によって彼の将来のために備えられた準備であった。やがて40歳になると、同胞のイスラエルを救わなければならない自分の使命を悟り、このために献身する決意を固めた。しかしその生れつきの短気のため、ある日、イスラエル人をいじめるエジプト人を不用意に殺害してしまった。その為に王の搜索を受けることになって、危険を避けて今はひとり、ミデアンに亡命しなければならなかった。以後40年間、失意のうちに黙々と羊飼いの生活を送ることになったのである。この長い失意と単調な生活こそ、モーセのためには更に大切な訓練の期間であって、彼はここで謙遜と忍耐と従順を学んだ。その結果後年「モーセはその人となり柔和なこと、地上のすべての人に勝っていた」といわれるに至ったのである。

10月 5日 今日の通読箇所 出エジプト記3：1～12

10月 6日 今日の通読箇所 出エジプト記3：13～22

「モーセの派遣」 出エジプト記3章

今日もモーセは羊の群れを連れてシナイ山の麓にいた。わたしもイスラエルの旅行中羊飼いの仕事ぶりを見た。携帯ラジオも聞かず、岩波文庫も読まず、まるで羊と同じように黙々と、羊の群れにつきそっている様子は、とても日本人には耐えられない単調な生活だ。しかし今こそ神の時が来たのだ。神は「燃える柴（シェキナー）」の中からモーセを呼び、使命を授け、今こそイスラエルの救いのために彼をエジプトに派遣して下さるのである。彼はここで、旧約中最大の啓示の一つを受けることになった。すなわち「ヤーウエ」という神のみ名の啓示だ。天地を造り、救いを与える真の神は、これ以後、長くこのみ名で呼ばれることになった。

10月 7日 今日の通読箇所 出エジプト記4：1～16

10月 8日 今日の通読箇所 出エジプト記4：17～31

「しるしの奇跡」 出エジプト記4章

蛇を捕らえるのはサタンに対する勝利を、ライ病を癒すのは罪を清める力を暗示している。いずれもモーセがイスラエルを救うために奇跡を行う力を与えられたことの象徴だ。モーセは謙遜になった代わりに少し臆病になったと見える。自分が訥弁で説得力がないと心配している。神様が「お前の口を造ったのは誰か」と説得なさるのに、なかなか承知しない。そこで兄のアロンをスポークスマンとすることを許された。モーセがエジプトに来て、このことを同胞に話すと、人々も感激してうやうやしく神を礼拝した。

10月9日 今日の通読箇所 出エジプト記5： 1～14

10月10日 今日の通読箇所 出エジプト記5： 15～23

「パロとの交渉」 出エジプト記5章

モーセが最初にパロに交渉したのは、砂漠に退いて真の神を礼拝し、犠牲を捧げること、いわば礼拝の自由、信仰生活の自由を求めたのであった。しかしパロは「そんなことを言う前に、お前等も働け」などと言って、てんから受け付けない。そればかりか、これをイスラエル人の怠慢とみなして、一段の労働強化をもってのぞむことになった。すなわち、煉瓦を焼くのに、今までと違って材料の藁の供給を受けられなくなり、今度は藁も自分で集めなければならず、しかも製産量、ノルマは前と同じ、という命令である。困惑したイスラエル人の中の軽率な者は、モーセに向かって「余計な御節介の結果だ」などと文句を言う。こう言う軽率な連中は、今後ずっとモーセの重荷になるのだ。

10月11日 今日の通読箇所 出エジプト記6： 1～13

10月12日 今日の通読箇所 出エジプト記6： 14～30

「約束の確認」 出エジプト記6章

仕事が始まったばかりで、困難は内外から起こり、事態は複雑である。このとき神は、モーセの祈りに答えて、エジプトの解放の約束を繰り返しお与えになった。その理由、目的は第一に、これはかねて神の与えたもうた契約である。第二、エジプトから解放されたイスラエル人はこれによって更に深く主を知るようになる。第三、以後イスラエルは主の民となり、主はイスラエルの神とな

る。こういうことだ。またこの章には、モーセの家族と、先祖が記されている。モーセはその信仰において、両親の影響を強く受けたが、実はそれは先祖譲りでもあったのである。

10月13日 今日の通読箇所 出エジプト記7： 1～13

10月14日 今日の通読箇所 出エジプト記7：14～25

「ナイル河の異変」 出エジプト記7章

強情なパロの前で、最初にモーセ達が見せた奇跡は、エジプトの魔術師もまねをした程度のものだったが、ナイル河の異変は重大である。なぜなら、エジプト人の生活は、ナイル河流域の豊富な生産物に依存していて、ナイル河はエジプトの神として、大切に礼拝されていたからである。毎年六月ごろのナイル河の溢水期には、パロが国民を代表してナイルを礼拝し、感謝と共に一年間のナイルの恩恵を祈る、重要な国家的祭典が行われた。おそらくこのときに王や高官の面前で、モーセはナイル河を血の流れに変えたと思われる。ここで事態は、エジプトの王権と、奴隷状態のイスラエルの対決に留まらず、真の神と、ナイルというエジプトの地方神との宗教的対決となってきたのだ。「私はパロを破って誉れを得、エジプト人に私が主であることを知らせるであろう」14章4節

10月15日 今日の通読箇所 出エジプト記8： 1～15

10月16日 今日の通読箇所 出エジプト記8：16～32

「かえる、ぶよ、あぶ」 出エジプト記8章

パロはもともと誇りと自信に満ち、強情頑固な人物だった。そのためにこれから次々と十の災害がエジプトを襲うことになる。しかしこれらのものは、実はそれぞれこの地方に特有の自然現象で、普段から見なれたものなのだ。ただ次々と大量に発生して、非常に大規模、深刻な災害になったこと。災害が、神の言葉に従い、明確な目的をもって発生したことは、誰の目にも明らかな奇跡だった。然るにパロは、駆け引きをしたり、災害に参って一度約束したことまでもまた変更したり、依然として強情だった。

10月17日 今日の通読箇所 出エジプト記9： 1～21

10月18日 今日の通読箇所 出エジプト記9： 22～35

「災害の期間」 出エジプト記9章

モーセが最初にパロに交渉したナイルの溢水期（6月頃）から、緊張の間にも一年たち、今は大麦が穂を出し、亜麻が花咲く4月になった。つまり災害はもう足掛け2年。正味10ヶ月に及んだのだ。困るのは国民だが、パロの態度は依然として、災害に遭っては譲り、災害が経過するとまた突っ張ることの繰り返しで、なかなか解決の見通しはつかなかった。このように絶対権力に慣れた者は、譲ることも折れることも知らない。パロのごときは、最後に神の手で紅海に沈められるまで、ついに悔い改めることがなかった。ちょうど、愛に満ちた神の救いの勧めを断り、最後の滅亡に陥る罪人のイラストのようだ。

10月19日 今日の通読箇所 出エジプト記10： 1～11

10月20日 今日の通読箇所 出エジプト記10： 12～29

「パロの優柔不断」 出エジプト記10章

打ち続く災害に、エジプトの国民も弱り果て、家来たちもパロに忠告して「イスラエル人と彼らの神にこのまま巻き込まれればエジプトは滅亡しかねません。彼らはエジプトのわなです。今はイスラエルを解放すべきです」と言った。しかしパロはこの章だけでも、災害に困惑して礼拝のために男子だけ出国させると妥協案を出し、次の災害にあうと「私は罪を犯した。神に私の罪の許しを祈願してくれ」と頼んだりする。しかし、すぐ気が変わり、今度は「動物は残せ」と言ったり、最後には結局出国を拒絶するなど、頑固、狡猾、優柔不断だった。ここに至って、ついに交渉は決裂する。

10月21日 今日の通読箇所 出エジプト記11： 1～10

「長子の死」 出エジプト記11章

やがてモーセの言葉のとおり暗黒がエジプト全土を覆った。しかしイスラエル人のところには光があった。エジプト人の目にもイスラエルに対する神の祝福は顕著で、みんな彼らに敬意を示すようになった。またモーセ達の姿も偉大な人物と映ったのである。ここで神は最後の決定的な災害として、全エジプト

人の長子の死を宣告された。これは神には全国民を滅亡させる力があることを示すものだ。(事実、最後まで神に反抗し、イスラエル人を追跡したパロとその軍隊は、紅海に沈んで全滅する) 人間には神に従うか、あるいは滅亡するかの二者択一しか許されない。神の忍耐強いお勧めにいつまでも無制限に甘えるのは危険だ。同時にいよいよイスラエル人にエジプト脱出の準備が命ぜられる。

10月22日 今日に通読箇所 出エジプト記12： 1～20

10月23日 今日に通読箇所 出エジプト記12：21～32

10月24日 今日に通読箇所 出エジプト記12：33～51

「過越の夜」 出エジプト記12章

この章には、モーセを通して神が命じられた(1)この夜すぐに実行すべき命令(2)エジプト脱出後に実行すべき命令(3)これを記念して後代に至るまで守るべき「過越祭」の命令、などが合わせて記録してあるようだ。

全地が暗黒に覆われている間に、イスラエル人はモーセの命令に従って家ごとに一頭の傷のない子羊を選んだ。そしてそれを殺して血を絞り、その血を家の入り口の、柱とかもいに塗った。これはイスラエル人の家であることの印となった。その夜エジプト人の長子を撃つために全国を行きめぐる天使たちは、この印のある家は、害を与えることなく過ぎ越したのであったが、これは後々まで「キリストの血による救い」の型となったのである。

同じ夜、イスラエル人はモーセの命令通り急いでエジプト脱出の準備をした。あの羊の肉を焼き、明日のために用意したパンも、大急ぎでまだ生地が膨れないまま焼き、野菜はその辺に野生の苦菜で間に合わせた。しかも、「腰を引きからげ、靴をはき、杖を取って」急いで食べた。その夜、全エジプトに叫び声が上がった。あらゆる家庭、家畜小屋、牧場で、人間と動物とを問わず長子が死んだのだ。人々はイスラエル人の家に来て、それぞれ金銀の宝物を差し出し「さあこれを持って早くエジプトから出て行ってください。私達の迫害を許し、私達を呪わないで、あなたがたの神に憐れみを祈ってください」と頼むのだった。今となってはパロもそれを承認しないわけにはいかなかった。それだからイスラエル人は解放奴隷のようではなく、まるで戦争に勝った凱旋軍のように多くの戦利品を携え、意気揚々とエジプトを出発したのだった。

これはイスラエルにとって一種の建国日であって「過越祭」として長く守られる記念日となった。

10月25日 今日の通読箇所 出エジプト記13： 1～16

10月26日 今日の通読箇所 出エジプト記13： 17～22

「エジプト脱出」 出エジプト記13章

この出来事がいつの事かについてはいろいろ議論もあるが、今日では「エジプト第19王朝、ラメセス2世のとき迫害を受け、その子メレンプタ王のとき脱出した」というのが定説のようである。大体BC1235頃にあたる。先祖ヤコブの時エジプトに移住してから430年、その頃70人だった家族も、今は百数十万人の一民族に成長していた。彼らがエジプトを出ると、すぐシェキナー（目に見える印をともなう父なる神の臨在）が現れて彼らを導いた。これは昼は雲の柱、夜は火の柱のように見えたという。以後シェキナーはイスラエルの陣営を離れることはなかったのである。人々はどんなに心強く感じたことだろう。彼らはシェキナーの留まるときはそこに宿営しシェキナーの進行するときは旅路に進んだ。こうして彼らは砂漠の道に入ってしまった。

10月27日 今日の通読箇所 出エジプト記14： 1～20

10月28日 今日の通読箇所 出エジプト記14： 21～31

「紅海の奇跡」 出エジプト記14章

パロはイスラエル人が立ち去った後、時間がたつとまたむらむらと腹が立ってきた。エジプトの王ともあるう者が、むざむざと奴隷どもに負けたのだ。

そこにイスラエル人たちの情報が入ってきた。彼らは紅海の岸に沿って南下し、山地と紅海の間に進んで、自ら袋の鼠になったように見えたのである。剛腹なパロはすぐ軍隊に命令し、自ら戦車隊を率いてイスラエル人を追跡した。

イスラエル人の方からも、砂煙を上げて追跡して来るエジプトの戦車隊の大軍が見える。前は紅海で前進はできない。進退はきわまった。人々は泣き叫び、はてはモーセに向かって食って掛かるありさまだ。激しい東風とシェキナーに妨げられて、エジプト軍はその夜は近づけない。モーセは夜を徹して祈っている。神はモーセに「あなた方は恐れてはならない。主が今日あなた方のためになされる救いを見なさい。主があなた方のために戦われるから、あなた方は黙していなさい」と言われた。

翌朝、神のご命令のようにモーセがその杖を紅海の上に差し伸べると、見よ、紅海は二つに分かれ、イスラエル人は水のない海底を通過して、全員無事に対岸に渡った。あとを追ってきたパロとその軍勢は、今度は流れ戻った海水に巻き込まれて全軍海に沈み、紅海の藻屑と消えた。

10月29日 今日の通読箇所 出エジプト記15： 1～21

10月30日 今日の通読箇所 出エジプト記15： 22～27

「勝利の賛美」 出エジプト記15章

エジプトの王、パロとその軍隊が、紅海の藻屑となったありさまを、対岸からイスラエル人は目撃した。そこでモーセの姉で、女預言者と呼ばれていたミリアムは女たちを引き連れ、タンバリンを取って神に感謝賛美を捧げた。全民族はこれに唱和して、シナイの山々もとどろくようだったろう。これが15章である。こうして彼らは、神の臨在の象徴である、雲の柱火の柱と、指導者モーセに導かれてシナイの荒野に入ってしまった。道は険しく、水も少ない。三日歩いてとあるオアシスにたどり着いてみると、その水は苦くて飲めなかった。モーセは神に示された木の枝で、この水を甘く変えて人々に飲ませた。すなわちメラ（苦い）の泉である。次にエリムのオアシスに着くと、ここはうって変わったすばらしいところで、人々はゆっくり休むことができた。

10月31日 今日の通読箇所 出エジプト記16： 1～ 8

11月 1日 今日の通読箇所 出エジプト記16： 9～30

11月 2日 今日の通読箇所 出エジプト記16： 31～36

「マナ」 出エジプト記16章

彼らは次第にシナイ半島の南部山岳地帯に進んだが、ここはもともと1600メートルに及ぶ岩山が連なり、道はその間の狭い谷を縫っていて、旅行は困難を極めた。岩塊、砂礫が多くて、食糧の産出は極端に少なく、現在もようやく六、七千人を養うに足る程度の地方だ。そこに二百万人のイスラエル人が入ったのだから、食糧飲料の不足は言うまでもなかった。ここで神様は奇跡のマナを与えて人々を養ってくださったのである。マナは毎日集めるように命じられた。ただし安息日の前日には、二日分を集め、翌日の安息日に休むことが許された。ある人はこれが神によって定められた、最初の有給休暇だという。